

へーべ

西村 悟郎
(人文学部文化学科)

Hebe

NISHIMURA Goro

はじめに

筆者はこれまでに、この「花の文化史」の項で、イギリスではよく見かけますが日本ではあまり見られない花壇の植物を取り上げてきたが、その中には、耐寒性ユーフォルビア、ジギタリス、宿根サルビア、アネモネ、クレマチス、トリカブトなどがある。筆者がイギリスにおけるこれらの植物の種類の豊富さに驚いたのは1993年以來であるが、それから約20年経た現在、耐寒性ユーフォルビア、ジギタリス、宿根サルビアは日本でも多くの種類を見かけるようになってきた。また、中国・日本原産であって幕末の頃、イギリスに渡ってから大輪花に改良され、再び日本に戻ってきた秋咲きのアネモネであるシュウメイギクは、最近では日本でも秋の花壇に欠かせないものになりつつある。クレマチスはイギリスほど種類が豊富ではないが、日本でも愛好家によって以前から花壇や鉢物で育てられてきた。ただ、トリカブトだけは毒草の知名度の高さのために普及していない。

さて、今回紹介するへーべ(Hebe)はイギリスのガーデンでは豊富な種類を見かけるのに対して、日本の花壇ではほとんど見ない植物の極めつけともいえるものである。先日、インターネットの質問欄に「先日、へーべという花を買いました。店の方がアルバイトだったので育て方が分からなかったけど、どうしても欲しくて買いました。どなたか育て方を教えていただけませんか。」という投稿が載っていて、その後には丁寧な解答もあった。現

在のところ日本ではヘーベはまだ珍しい植物の範疇にあって、鉢物として流通している段階で、花壇植物としては、まだほとんど使われていない。日本で出版されている参考書にも、ヘーベは夏の暑さと湿度に弱く、低地で育てるのが難しいと口をそろえたように書いてある。それは先達の経験から語られることであるので、実際にそうであろうが、かつてラベンダーは夏の暑さに弱いので日本の低地で育てるのは難しいと言われていたが、最近は東京でも花壇で育てられているのも見かける。多摩キャンパスでもイングリッシュラベンダーがよく育っている。

1. ヘーベについて

ヘーベはゴマノハグサ科に属する低木で、ニュージーランド、オーストラリア、南アメリカなど南半球に75種が分布する。特にニュージーランドに分布が多い。形状は匍匐する丈の低いものから、茎が直立して低木になるもの、また木のようなものまである。葉は常緑で光沢のある緑色、日本では観葉植物として扱われることもある。花は多くの種で腋生であるが、頂生するものもある。また、花序は総状花序、穂状花序、あるいは単生する。花冠は4つに分かれる。ヘーベはかつてはペロニカ (*Veronica*) 属に含まれていたが、木本性であることや、葉が対生し、蒴果が裂開するところから別属に分けられた。Hebeの意味はギリシャ語の青春の女神ヘーベ (Hebe) から来ている。ヘーベは鑑賞に適する種類の多くが、高さが20cmから2mくらいの範囲に入るので、一年草、宿根草などの草本と組み合わせてミックスボーダーに用いられている (図1)。また、丈の低い種類はロックガーデンに植えられ、高い種類は樹形がこんもりと整っているので、庭園のアクセントとして独立して植えられたり、列植して生垣にもなる。



図1 コトンマナーガーデンのミックスボーダー。左端が白花のヘーベ

2. ヘーベ属に含まれる主な種および品種

1) 草丈が20-30cmで匍匐する種と品種

(1) *Hebe* 'Yongii' = (*H.* 'Carl Teschner') (図2)

高さが20cmほどで匍匐性。株幅が60cmほどになるので、うまく育てばグラウンドカバーになる。茎は暗紫色。葉は長さが1cmほどで楕円形、光沢のある濃緑色である。葉の縁に赤みが入る。小さな花が短い総状花序に密に着く。花は開花時には紫色で、やがて色があせて白色になる。開花期は6-7月。耐寒性がある。本品種は *H. elliptica* と *H. pimeleoides* の交配で、1930 年ごろからニュージーランド南島のクライストチャーチ植物で育てられている。1960年にイギリスに送られた。ボーダー花壇の前段やロックガーデンに向く。日本では鉢花によいであろう。

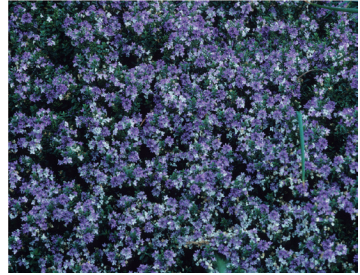


図2 *Hebe* 'Yongii'

(2) *H. pinguifolia* 'Pagei' (図3)

高さ10-20cm。直立あるいは匍匐する。葉は灰緑色で幅が広く、長さは1cmほど。若い葉は縁に赤味が入る。花色は白。開花期は4月下旬から6月で、ヘーベの中では最初に咲き出す。耐寒性がある。品種名は1926年にニュージーランド南島のデュネディン植物園園長Edward Page氏に因んで付けられた。葉が灰白色の本品種はヨーロッパで広くロックガーデンに用いられている。



図3 *Hebe pinguifolia* 'Pagei'

2) 草丈が40-60cmの種と品種

(1) *H.* 'Polly Moore' (図4)

高さ40cm。茎が多く立ち、小型でコンパクトにまとまった低木。葉は幅の広い披針形で緑色、周縁に赤が入る。茎の上部の葉腋から長さ7-8cmの総状花序を出して青紫の花をつける。耐寒性がある。交配親は分かっていない。



図4 *Hebe* 'Polly Moore'

(2) *H. ochracea* 'James Stirling' (図5)

高さ40cm。よく分枝し、樹冠の上部が平らに揃う。葉は展開することなく鱗片状に茎の周囲を覆う。外見がヒノキやイトスギなどの針葉樹に似ており、花が咲くまでは外観からは顕花植物に見えない。このような形態の種類はウィップコードヘーベ (Whipcorde Hebe) とよばれる。茎の上部に長さ1-2cmの腋性の



図5 *Hebe ochracea* 'James Stirling'

の総状花序を出し、白い花をつける。開花期は5-6月。耐寒性あり。品種名はウィリントンにあるニュージーランド国立植物園の園長の名前からとったものである。イギリスでは特に人気がある。他には、*H. cupressoides*も外観が似ているが、本種より大型である。

(3) *H. macrantha* (図6)

草丈60cm。茎は直立する。茎の伸長とともに下部の葉が落ちて茎だけ残る傾向がある。葉は厚く広披針形、濃緑色で周縁に鋸歯が入る。長さは2.5cmで、縁に赤みが入る。花はヘーベの中では大型で花径が2.5cm。花色は美しい純白で茎頂部の葉腋につく。開花期は6月。耐寒性あり。ニュージーランド南島の亜高山のやせ地に自生する。



図6 *Hebe macrantha*

(4) *H. hulkeana* (図7)

草丈50-60cmで分枝した茎が広がる。株幅は60cm。葉は卵形で長さ約5cm。光沢のある濃緑色で周縁に鋸歯が入る。長さ30cmの総状花序を出し、ライラック色の花がたくさん咲く。開花期は5-6月。本種はニュージーランド南島の東側の日当たりのよい岩の多い場所で自生する。栽培は日当たりよく、水はけ、風通しのよい場所がよい。過湿だとベト病が出る。



図7 *Hebe hulkeana*

3) 草丈1m以上になる大型の種と品種

(1) *H. glaucophylla* 'Variegata' (図8)

草丈1m。茎は基部でよく分枝し、多くの茎が直立する。葉は細長く、長さは約1.5cm。淡緑色で乳白色の覆輪が入る。花はライラック色で総状花序につく。開花期は6月。



図8 *Hebe glaucophylla* 'Variegata'

(2) *H.* 'Great Orme' (図9)

草丈1.2-1.5m。茎がよく分枝して、こんもりとした樹形となる。茎の色は暗紫色で、光沢ある濃緑色の葉の色とコントラストがはっきりしている。葉は細長い披針形で長さは約8cm。茎の上部の葉腋から対生に長さ約10cmの穂状花序が出て、小さな鮮桃色の花が咲き、やがて花序の基部から白色に変わる。花は夏



図9 *Hebe* 'Great Orme'

から秋にかけて長く咲く。耐寒性がある。本品種は*H. parviflora*と*H. speciosa*の交配である。

(3) *H. cupressoides* (図10)

高さ1.2m。茎が直立して密生する。葉は展開しないで鱗片状に茎を覆うので外観はヒノキやイトスギなどの針葉樹に似る。*H. ochracea* ‘James Stirling’と同じウィップコードヘーベに属する。枝の上部に長さ2.5cmほどの腋生総状花序を出し、淡藤青色の花を密につける。開花期は6-7月。耐寒性がある。本種はニュージーランド南島の南アルプスの東斜面に川床やテラスに自生する。



図10 *Hebe cupressoides*

(4) *H. stenophylla* (= *H. parviflora* var. *angustifolia*) (図11)

高さ1.5m。茎がよく分枝し、こんもりした低木。葉は明るい緑で、幾分垂れる。細長い披針形で長さは3-4cm。茎の上部の葉腋から対生に長さ約10cmの総状花序が出て白い花をつける。たくさんの花序が形成される。耐寒性がある。開花期は7-8月。本種はニュージーランド南島と北島の南西部で見られる。



図11 *Hebe stenophylla*

(5) *H. salicifolia* (図12)

高さ2-3m。直立した茎が多く立ち、こんもりとした大型の低木。葉は披針形で長さは12cm。光沢のある明緑色。茎の上部の葉腋から対生に15-20cmの総状花序が伸びてたくさんの花をつける。花序は垂れる

ものが多い。花色は初めは淡藤青色で、やがて色があせて白色になる。開花期は6月から12月までと長い。本種はヘーベの中で、樹形と花が最も立派な姿をしているといえる。ニュージーランド南島のいたるところで自生している。多くの園芸品種の交配親になっている。



図12 *Hebe salicifolia*

3. まとめ

この文化史をまとめるに当たってニュージーランドのヘーベ協会（Hebe Society）のホームページに収められているヘーベの図鑑が非常に参考になった。そこには、現在協会がファイルしているヘーベの種と品種名がアルファベット順に写真と短い解説とともに載せられている。それぞれの写真が鮮明で、解説も簡潔に特徴と分布地域および来歴が書かれている。その内容の充実振りには目を見張るものがある。このホームページを通してニュージーランドにはヘーベに関する充実した園芸文化が育まれていることを知った。

筆者は授業でヨーロッパにおけるプラントハンターのことを話すか、そこではイギリスを中心に話が進むので、キューガーデンや王立園芸協会から派遣されたプラントハンターが世界中から植物を集めてイギリスに持ち帰り、イギリスでそれらの植物の栽培と品種改良が進められて、世界の園芸界をリードする現在の優れた品種群が作り出されたという話になっている。ところが、ヘーベに関しては、多くの種が分布しているニュージーランドで、ニュージーランドの人々によって分布が調査され、栽培され、多くの新しい品種が作り出されて、それがイギリスに送られているのである。ニュージーランドの人口の多くはイギリスからの移住者であるから、イギリス人の園芸好きの気質をもって、ニュージーランドで園芸文化が発達していることは容易に想像できる。植物はイギリスのみを中心に回っているのではないのだ。

最後になるが、序論で日本ではヘーベが、まだ花壇植物としてほとんど使われていないことを述べ、続いてイギリスの花壇で見られるヘーベを紹介し

た。

夏の涼しいイギリス、またニュージーランドに比べて日本の夏は高温多湿でヘーベには難しい気候であるが、これまでに難しいといわれていた植物でも日本の気候に馴染んできているものも多いので、ヘーベもぜひ日本の花壇の植物の仲間入りをさせたい。

4. 参考文献

塚本洋太郎編 1989 園芸植物大事典 4巻: 348-352 小学館

Huxley, A. (ed.) 1992 Dictionary of Gardening Vol. 2: 500-509 Royal Horticultural Society.

クリストファー・ブリッケル編 (横井政人監訳) 2003 A-Z 園芸植物百科事典 pp. 494-496 誠文堂新光社

安藤敏夫、小笠原亮、長岡求監修 2007 日本花図鑑 p. 195

Hebe Society 2012 http://www.hebesoc.org/hebes_s/hebe_speciosa (URL最終確認2012年11月30日)